

知的障害養護学校に在学する児童生徒の家庭・地域での生活に関する基礎研究II

武蔵博文・高野喜一*・七澤邦彦**・高畑庄蔵***

(2002年10月21日受理)

Research on Daily and Community Life of Children in Special School for Mental Handicap II

Hirofumi MUSASHI, Kiichi TAKANO, Kunihiko NANASAWA
and Shozo TAKAHATA

E-mail : musashi@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード : 知的障害 ノーマライゼーション 生活の質 地域に根ざした支援

Key words : mental handicap, normalization, Quality of Life, community referenced support

目 的

知的障害養護学校に在学する児童生徒の家庭と地域での生活実態を探ることをねらいとして「家庭・地域生活実態アンケート調査」を実施した(武蔵・高野・七澤・高畑, 2002)。本論は、そのうち、家庭生活での本人の位置づけ・役割について報告した。具体的には、金銭の使い方と管理、ふだんの家での生活、決まった役割(お手伝い)、学校教育で役立ったことである。

アンケート調査の内容と実施

武蔵・高野・七澤・高畑(2002)にまとめたとおりである。調査内容のうち、今回報告する調査項目のみをTable 1に示した。

富山県内の知的障害養護学校5校(県立にいかわ

養護学校、県立しらとり養護学校、県立高岡養護学校、県立となみ養護学校、富山大学教育学部附属養護学校)に、1999年11月現在、在籍していた児童生徒の保護者全員を対象とした。対象児童生徒の総数は550名、小学部児童183名、中学部生徒140名、高等部生徒220名であった。

調査の実施に当たり、富山県知的障害養護学校PTA連合会の協力を得た。各学校へのアンケート用紙の発送と回収は附属養護学校PTAが中心に行った。実施時期は1999年11月から12月であった。

回収率は85.3%(回収総数469名)であり、小学部児童は89.4%(168名)、中学部生徒は83.6%(117名)、高等部生徒は82.9%(184名)であった。どの学部についても、8割を越えるアンケートを回収することができた。

* 富山大学教育学部附属養護学校平成12年度PTA会長
** 富山県立ふるさと養護学校
*** 富山大学教育学部附属養護学校

Table 1 家庭生活での本人の位置づけ・役割に関する調査項目

本人について	
おこづかい、金銭管理	1. おこづかいの有無 (択一選択) 2. ひと月あたりのおこづかいの額 3. おこづかいの使い方 (自由記述) 4. 金銭の管理の仕方 (択一選択)
ふだんの家での生活について	
1. 家族とすること	1. 家族と一緒に過ごす時間 2. 家族との過ごし方 (複数選択)
2. 一人ですること	一人での過ごし方 (複数選択)
3. 決まった役割・お手伝い	1. 決まった役割の有無 (択一選択) 2. 決まった役割の内容と頻度 (限定記述) 3. 決まった役割がない方へ、その理由 (複数選択)
4. 学校教育で役立ったこと	学校で受けた教育のうち、家庭で役立ったこと (自由記述)

結果と考察

1. 金銭の使い方と管理

1) おこづかいの有無

子どもにおこづかいをあげているか否かを尋ねたところ、回答した462名のうち、「あげている」が19.5% (90名)、「あげていない」が80.5% (372名)であった。

学部別にみると、小学部では、回答した167名のうち、「あげている」4.8% (8名)にすぎない。中学部では、回答した115名のうち、14.8% (17名)に留まった。高等部になると、回答した180名のうち、36.1% (65名)となった。それでも6割以上の生徒が決まったお金を得ていなかった。この点については、後述する金銭の管理の仕方とも関連する。

2) おこづかいの額

おこづかいをあげていると回答した保護者90名に、その額を尋ねて、学部別にFig. 1に示した。全体では、おこづかい「千円以上3千円未満」が36.7% (33

名)、「3千円以上5千円未満」が24.4% (22名)となり、合わせると全体の6割以上を占めた。

学部別にみると、年齢にしたがい、おこづかいの額が上がるのが分かった。小学部では、回答者は少ないが、「500円未満」と「千円以上3千円未満」という回答が多く、中学部になると、「500円以上千円未満」から「3千円以上5千円未満」までの回答が多くなり、高等部になると、「千円以上3千円未満」から「5千円以上1万円未満」までの回答が多くなった。ただし、高等部になっても「500円未満」という回答もわずかにあった。

本調査により示されたおこづかいの額は、普通の小学生の1ヶ月のおこづかいの額、高校生が親からもらうおこづかいの額とほぼ同額であった。福武書店教育研究所 (1994; 1995) によれば、小学5年生の1ヶ月のおこづかいの平均額は1,172円であり、高校生が親からもらうおこづかいの額は5千円から7千円がもっとも多く、それに次いで3千円から5千円、7千円から1万円となっていた。つまり、知的

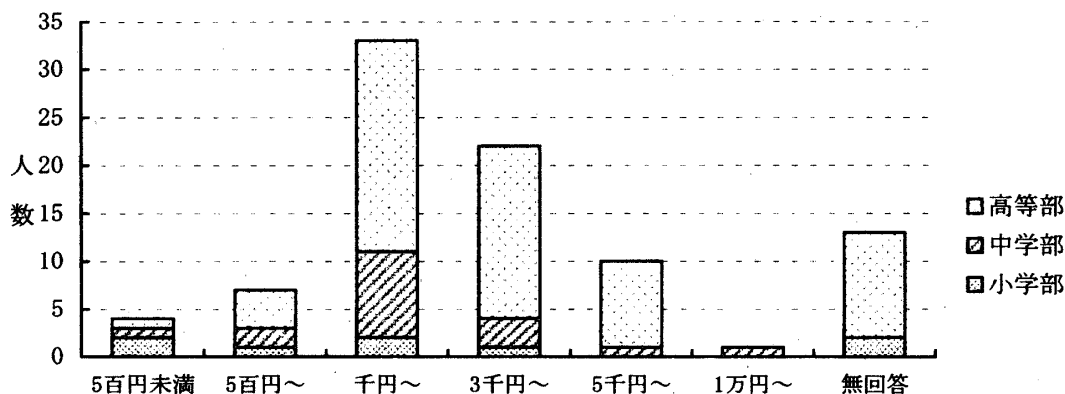


Fig. 1 おこづかいの額

Table 2 おこづかいの使い方

	全体	小	中	高
回答者数	89	6	17	66
のべ回答数	219	9	40	170
家の中での娯楽に関するもの	130	3	24	103
本・雑誌・マンガ	56	2	11	43
CD・カセットテープ	29		5	24
ゲーム・ゲームソフト	21		3	18
文具(ノート、便箋、カード、筆記具、糊、消しゴム、セロテープ等)	13		1	12
ビデオ	6	1	1	4
おもちゃ・プラモデル・ぬりえ	4		3	1
好きな物	1			1
食べ物・飲物	66	4	13	49
食物・お菓子・おやつ・菓子パン・アイス等	39	2	8	29
飲料・ジュース・缶コーヒー	27	2	5	20
屋外での余暇に関するもの	9		3	6
ビデオ・CDレンタル	3			3
ゲームセンター	2		1	1
コンビニ	1			1
電車賃	1			1
使い捨てカメラ	1		1	
風呂代	1		1	
日用品等	7			7
日用雑貨(石鹸・電池等)	3			3
服	2			2
花・ハーブ	2			2
貯金等	7	2		5
貯金	5	2		3
プレゼント	2			2

障害養護学校の児童生徒では、おこづかいをもらっている者はかなり少ないが、もらっている者のその額は普通児の場合と差のないことが分かる。

3) おこづかいの使い方

続いて、おこづかいをあげていると回答した保護者に、その使い方について自由記述で回答を求め、

89名から得た回答を分類して、学部別にTable 2にまとめた。

「家の中での娯楽に関するもの」がのべ回答数の59.4% (130)、「食べ物・飲物」が30.1% (66)と、この2つの内容で回答のほとんどを占めた。中高等部になるほど、雑誌・マンガ、CD、ゲームという回答が増え、これらに文具が加わった。全体として、本人の好む雑誌やマンガを眺めたり、音楽CDやテープをかけて過ごす、テレビゲームに熱中するという家の中での静的な活動や、ジュースやお菓子を買って飲食する自己消費的な活動におこづかいを費やしていることが分かる。

「屋外での余暇に関するもの」はのべ回答数の4.1% (9)、「日用品等」は3.2% (7)にすぎない。小学部ではこうした回答は全くなかった。屋外での余暇活動やスーパー等へ買い物に出かける、自分の身の回りのものを選ぶ等のことは、日常生活の中で多少は経験するはずである。本人のおこづかいの使い道には到っていない。高等部では、屋外での余暇に関するものとして、レンタルショップ、ゲームセンター、コンビニ、JRの電車賃(休日の過ごし方として電車に乗り歩くための)があげられた。これらは、多くの人が出入りする場所ではあるが、周囲の人と関係を持たずに見て回る活動であり、消極的な屋外での過ごし方におこづかいを使っていることが分かる。

4) 金銭管理の仕方

金銭管理の仕方を選択式で質問し、115名から得た回答を、学部別にFig. 2に示した。回答した保護者は回答総数の24.5%とかなり少なかった。全体では、「本人はお金に関心がない」が38.1% (59名)と一番

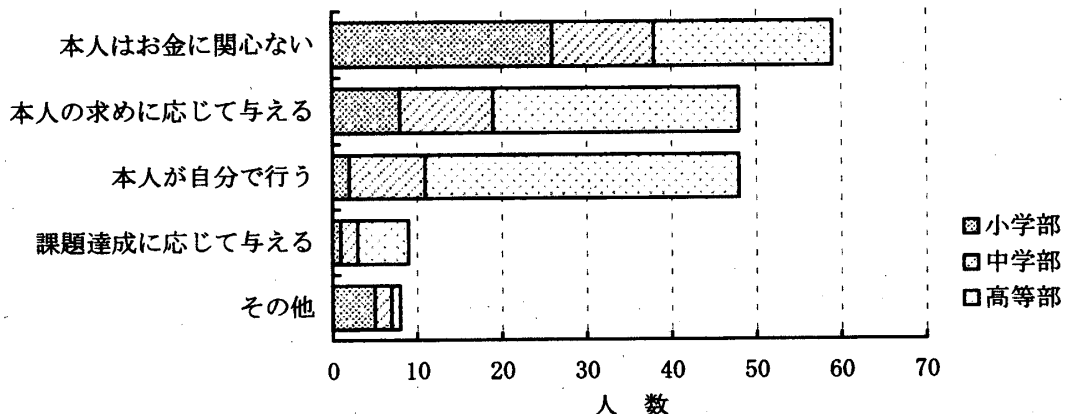


Fig. 2 金銭の管理の仕方

多く、次いで、「本人の求めに応じて与える」と「本人が自分で行う」が31.0% (48名) と等しく、「課題達成に応じて与える」が5.8% (9名)、「その他」が5.2% (8名)であった。このように、回答した保護者でも、「本人はお金に関心がない」という内容が多かったことから、本問の回答率が低かった理由として、知的障害養護学校に在学する児童生徒が、金銭を管理する以前に、お金の意味や働きそのものを理解できていないことが推測される。

学部別にみると、小学部では、「本人はお金に関心がない」が72.2% (26名) と大多数を占めた。「その他」は13.9% (5名)であったが、その内容は、「母が持っている」「買い物ときだけ与える」「障害が重度のためできない」「もらえるだけで満足して使うことがない」というものであった。中学部になると、「本人はお金に関心がない」、「本人の求めに応じて与える」、「本人が自分で行う」がほぼ同じ割合となった。高等部になって、「本人が自分で行う」が42.5% (37名) と半数近くを占め、順位が逆転した。

金銭の取扱いについては、知的障害養護学校の学習指導要領で、小学部生活科の内容に「簡単な買い物をする」「金銭の必要なことが分かる」「金銭の取扱いに慣れる」、中学部数学科の内容に「金銭の使い方慣れる」をあげている。学校教育では、生活科、数学科だけでなく、様々な学習活動を通じて取り扱っているはずである。残念なことに、家庭での金銭管理に生かせるほどの指導・支援に到っていないことが分かる。

2. ふだんの家での生活

1) 家族と過ごす時間の有無

子どもと過ごす時間があるか否かを尋ねたところ、回答した449名のうち、「ある」が75.9% (341名)、「あまりない」が24.1% (108名)であった。

学部別にみると、年齢にしたがい、家族と過ごす時間があるという回答が減ることが示された。小学部では、回答した159名のうち、「ある」が81.1% (129名)であり、中学部では、回答した114名のうち、75.4% (86名)、高等部では、回答した176名のうち、71.6% (126名)となった。

2) 家族との過ごし方

続いて、ふだん家族と一緒に過ごすときの内容を

複数選択式で質問し、446名から得た回答を学部別に Fig. 3 に示した。全体では、「テレビ」が飛び抜けて多く、82.3% (367名) を占め、次いで「お手伝い」が41.3% (184名)、「ビデオ」が39.5% (176名)、「おしゃべり」が33.4% (149名)、「好きな物で遊ぶ」が30.7% (137名)、「宿題」が30.0% (134名)、「CD・音楽鑑賞」が25.1% (112名)の順であった。

「テレビ」「ビデオ」「CD・音楽鑑賞」は次に述べる一人でする活動内容とも重複する。家族の関わり合いというよりは、一人でも行う活動を、家族と同一の場でも行っているにすぎない。テレビやビデオ等を通じて、家族同士の関わり合いの乏しい活動により、場面を共有し時間を過ごしていた。現代の家庭によくみられる家族の団らん過ごし方といえる。ただし、「CD・音楽鑑賞」には、音楽を聴きながら、一緒に歌う・共に体を動かすことも報告された。

「お手伝い」「おしゃべり」は、中学部、高等部になるにしたがい、回答が多くなった。お手伝いが家

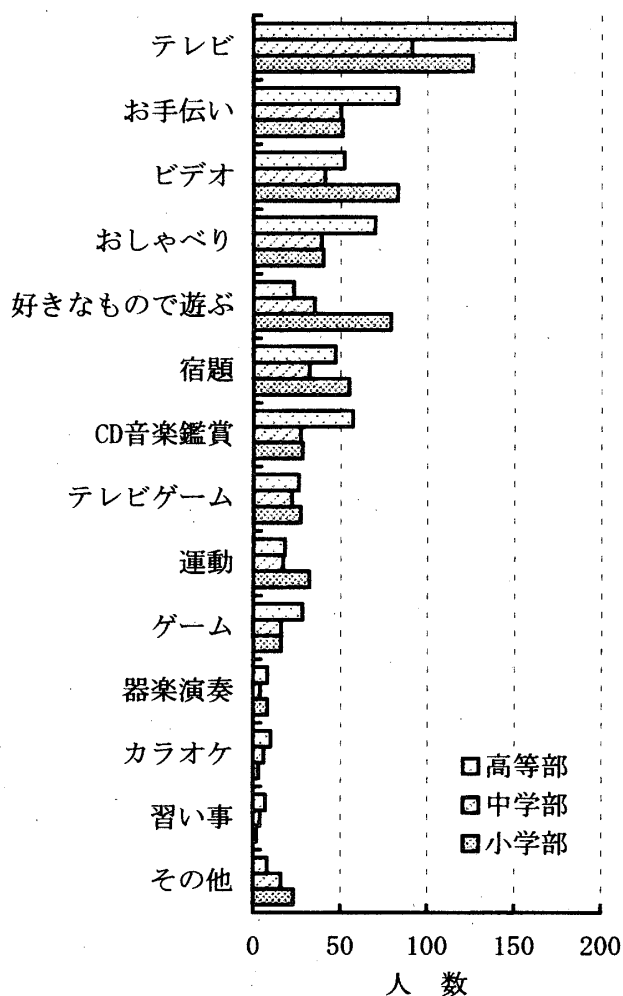


Fig. 3 ふだん家で家族とすること

族と過ごす活動の上位にあることに注目したい。お手伝いが、身につけた日常生活技能を家庭で行うというだけでなく、家族との関わりを促進する活動であることが分かる。その関わり合いを促進する要因を分析して、学校教育での指導に生かしていくことを検討する必要がある。小学部の早い段階から、日常生活技能の指導において、こうした側面を重視した指導が求められる。

「好きな物で遊ぶ」「宿題」は、本人のする活動に周囲が合わせたものといえる。「好きな物で遊ぶ」は小学部が多い。本人がおもちゃや遊具で遊ぶことに関心を持ち始め、それを介して家族との関わりが持てるようになる時期と考えられる。今回の調査では、こうした家族との関わりがどのように経過していくかはっきりとしなかった。「宿題」はどの学部でも一定数の回答があった。ことばや数等の学習プリントから家庭でのお手伝いまで様々な内容があるが、周囲の負担があまりに高いと、家族と過ごす活動として発展していかないと考えられる。

3) 一人での過ごし方

ふだん家庭で一人で過ごすときの内容を複数選択式で質問し、457名から得た回答を学部別にFig. 4に示した。全体では、家族と過ごすときと同様に「テレビ」が飛び抜けて多く、65.0% (297名) を占め、次いで「ビデオ」が46.0% (210名)、「CD・音楽鑑賞」が36.1% (165名)、「ごろ寝」が29.1% (133名)の順であった。

これらは、いずれも室内で行う、活動量の少ないものであった。小学部から高等部までを通じて、目的性も低く、時間を多く消費する活動が日常化していた。家庭で本人が目的を持って、時間を有効に活用し、自分の時間を過ごすことの難しさが分かる。学校教育においても、家庭でのこうした実情を踏まえて、家庭で本人が一人でできる活動、本人が自分で有効に時間を活用する方法を指導・支援していく必要がある。

学部別にみると、前述した内容の他に、学部ごとに特徴的な内容がみられた。小学部では「おもちゃで遊ぶ」、「好きな物で遊ぶ」が多かった。記述欄に記された内容は、ボール遊び、電車や車のおもちゃで遊ぶ、物を並べる、パズル、ぬり絵等の比較的単純で、結果が分かりやすい、感覚・知覚的な遊びが

主であった。

高等部になると、「テレビゲーム」、「雑誌・新聞を読む」、「宿題」が多くなった。テレビゲームをする、好みの雑誌を眺める、宿題に追われるのは、現代の中高生にもよくみられる時間の過ごし方である。しかし、これらも目的性が高いとは言えず、時間を多く消費する活動である。「お手伝い」「様々な物づくり」「楽器演奏」「習い事」等は少ないながら、高等部でよりみられた。こうした本人の興味に基づき、周囲の者とも共有できる趣味的な内容が増えることが望まれる。

なお、中学部は、小学部と高等部の中間的な回答

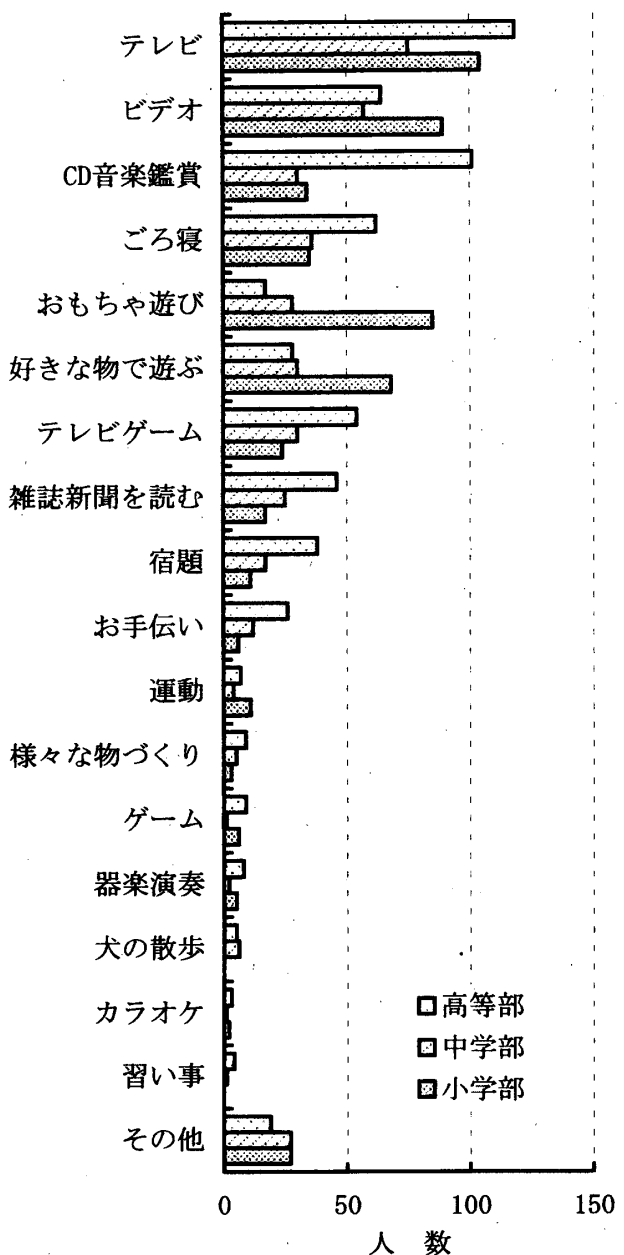


Fig. 4 ふだん家で一人ですること

Table 3 家庭での役割・お手伝い

	全体	小	中	高
回答者数	319	104	84	131
のべ回答数	592	166	165	261
食事に関すること 食事の準備・配膳・後片づけ、 茶碗食器運び・洗い・拭き、 テーブル・台拭き	220	72	54	94
掃除に関すること 部屋・階段・廊下掃除、玄関・ 車庫掃除、台所・トイレ・洗面 所掃除、靴ならべ、モップか け、掃き掃除	72	19	24	29
洗濯に関すること 洗濯機に服を入れる、洗濯す る、洗濯物を干す・取り込む・ たたむ、タオルをたたむ、アイ ロンがけ	69	15	20	34
料理に関すること 料理手伝い、食事の支度、野菜 切り、卵割り、米とぎ、お茶入 れ	52	21	13	18
片づけ・ゴミに関すること 片づけ、部屋片づけ、空き缶・ 牛乳瓶・新聞の片づけ、ゴミ拾 い・集め、ゴミ出し	52	11	16	25
風呂に関すること 風呂を沸かす、水を入れる、風 呂掃除をする	33	6	11	16
物運びに関すること 買い物運び、荷物運び、郵便 物・新聞を取ってくる、回覧板 を届ける	25	7	8	10
布団・寝具に関すること 布団敷き・上げ下ろし、布団た たみ、枕カバーがえ	24	6	7	11
日常生活の些細なこと カーテンの開閉、電気を消す、 テレビを消す、家人を呼びにい く、カレンダーめくり、仏壇の 御膳	15	5	7	3
ペットの世話・散歩 犬の散歩、鳥・猫・ハムスター の世話	14	3	4	7
その他	16	1	1	14
灯油入れ	4			4
買い物	3	1		2
お菓子づくり	2			2
家事	2			2
農作業	2		1	1
子守	1			1
内職の手伝い	1			1
配達・集金	1			1

が多かった。「好きな物で遊ぶ」、「おもちゃで遊ぶ」に加えて、「テレビゲーム」、「雑誌・新聞を読む」という回答が同程度なされた。

3. 家庭での役割・お手伝い

1) 決まった役割・お手伝いの有無

家庭で決まった役割（お手伝い）があるか否かをたずねたところ、回答した464名のうち、「ある」が34.1%（158名）、「時々」が36.2%（168名）、「ない」が29.7%（138名）であった。

学部別にみると、年齢にしたがい、決まった役割（お手伝い）があるという回答が増えることが示された。小学部では、回答した166名のうち、「ある」が23.5%（39名）でしかなく、「時々」が41.0%（68名）、「ない」が35.5%（59名）であった。中学部では、回答した118名のうち、「ある」が31.4%（37名）、「時々」が41.5%（49名）、「ない」が27.1%（32名）となり、「ない」という回答が減った。高等部では、回答した180名のうち、「ある」が45.6%（82名）、「時々」が28.3%（51名）、「ない」が26.1%（47名）と、「時々」「ない」のいずれの回答も減少した。

2) 決まった役割・お手伝いの内容

続いて、決まった役割（お手伝い）の内容について限定記述で回答を求め、319名から得た回答を分類して、学部別にTable 3にまとめた。

どの学部でも「食事に関すること」が飛び抜けて多く、のべ回答数の37.2%（220）となった。小学部では、「箸をならべる」「茶碗をはこぶ」「テーブル拭き」といった回答が目立ち、食事の準備や後片づけの一部分を保護者といっしょに行う様子が分かる。中高等部になると、準備や配膳、片づけ、洗い物といった内容をほぼ毎日行っているという回答が多くなり、家庭の中での役割となっていることが分かる。

次いで、「掃除に関すること」が12.2%（72）であった。部屋や廊下、階段等の場所が多くあがった他に、玄関、車庫、台所、トイレを掃除するという回答もあった。モップ掛け、掃き掃除という具合に掃除の仕方での回答もあった。「洗濯に関すること」は11.7%（69）であった。小学部では「脱いだ服を洗濯機に入れる」「洗濯物を取り込む」「タオルをたたむ」といった簡単な内容の回答が目立った。中高等部では、「（洗濯して）干して取り込むまでのすべて」という回答もあり、「自分の身の回りの物を手洗いする」「アイロンがけ」等の回答もあった。

「料理に関すること」は8.8%（52）で、小学部では、「野菜を切る」「卵を割る」「米とぎ」等の部分的に料理を体験する内容が多く、中高等部では、「料理

の手伝い」「食事の支度」とだけの回答が目立った。「片づけ・ゴミに関すること」は8.8% (52) で、片づけやゴミ集めに関する様々なことがあげられた。片づけやゴミ集めは手順を分かりやすく工夫することができ、しかもバリエーションをつけやすい活動といえる。

以上のように、決まった役割（お手伝い）として、毎日の生活に欠くことのできない事柄があげられた。小学部では、比較的単純で見通しが持ちやすい活動、ある一部分を保護者の監督の下に行う活動が多かった。中高等部では、まとまった一連の活動を、家事として分担し行っていた。

3) 決まった役割がない理由

決まった役割（お手伝い）が「ない」と回答した保護者138名に、その理由を複数選択式で質問し、136名から得た回答をFig. 5に示した。「特に理由はない」がいずれの学部でも多く、全体の44.1% (60名) を占めた。次いで、「できることが分からない」が20.6% (28名)、「その他」が20.6% (28名)、「手がかかる」が19.9% (27名) とほぼ同じ割合であった。「本人が疲れている」は3.7% (5名) にすぎなかった。

「その他」の内容としては、小学部では「重度のため」「身体障害があるため」「能力的にできない」といった障害上の問題や、「こちらの要求が分からない」「言葉が通じない」といったコミュニケーション上の問題、「気分が乗らない」「逃げてしまう」「思わぬいたずらをする」といった行動上の問題があげられた。これらは、決まった役割（お手伝い）に留まらず、家庭での生活そのものを進めていく上で問題である。中高等部では「週末しか帰らないので」「一人を好み、家族を避ける」「本人が嫌がる」

「反抗期」「続かない」等があげられた。思春期の本人および本人の家族との関係の問題である。思春期の問題に対応しながら、家庭での生活をいかに進めていくかが課題といえる。

4. 学校教育で役立ったこと

学校で習ったことで、家庭で役立っていることについて自由記述で回答を求め、230名から得た回答を分類して、学部別にTable 4にまとめた。

「日常生活に関すること」がのべ回答数の47.9% (157) となった。「掃除」「料理」「食事」「洗濯」「家事手伝い」「片づけ・ゴミ」「生活全般」等があげられた。これらの多くは、家庭での役割（お手伝い）の項目であげられた内容と重複していた。保護者の多くが家庭生活に直接につながる学習内容を役立ったと考えていることが分かる。家庭生活と直接につながる学習内容でないと、家庭にはわかりにくいということがある反面、家庭生活とつながる学習内容こそ、保護者の持つニーズの一端を表していると捉えることもできる。保護者の持つニーズ、家庭生活に生きる力という点から、学校教育で取り上げる学習内容を検討し直す余地がある。

次いで、「基本的な生活習慣に関すること」が17.3% (57) となった。とくに小学部では「着替え」「食事」「トイレ」といった身辺処理に関わることがあげられた。一方、中高等部では「生活習慣」「規則正しい生活」があげられた。これは、乱れがちな生活の仕方・習慣を正すという意味合いが大きいと考えられる。

「本人の態度・様子に関すること」は12.5% (41) であり、「挨拶、返事、ことば使い」「進んで行う、

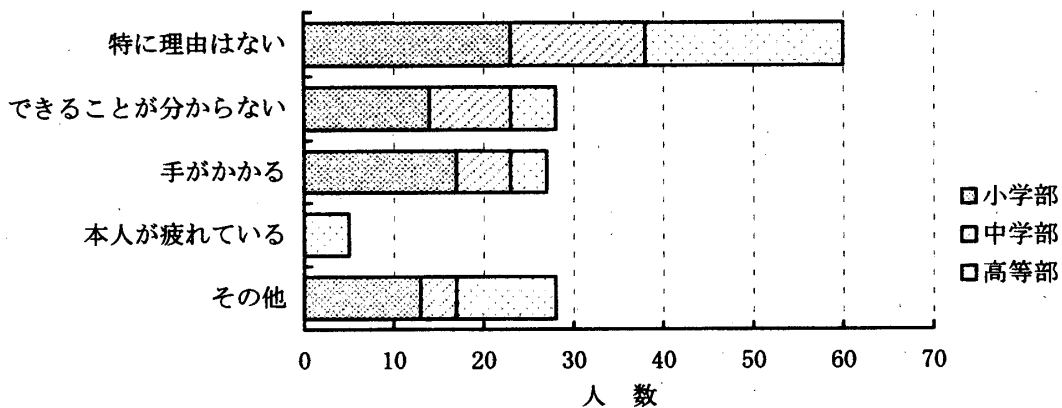


Fig. 5 決まった役割・お手伝いのない理由

Table 4 学校教育で役立っていること

	全体	小	中	高
回答者数	230	89	56	85
のべ回答数	328	134	89	105
日常生活に関すること	157	56	46	55
・掃除、階段・廊下掃除、モップかけ、雑巾がけ	40	15	13	12
・簡単な料理、野菜の切り方、卵割り、包丁の扱い方、米とぎ、ご飯を炊く、お茶入れ	33	8	9	16
・食事の準備・用意・配膳、食器洗い、食事の後片づけ、台拭き	31	15	6	10
・洗濯、洗濯物干し・たたみ、アイロンがけ	17	4	4	9
・整理整頓・片づけ、ゴミ出し	15	6	7	2
・家事手伝い、生活全般、お手伝いを進んで行う	13	6	3	4
・裁縫、布団敷き、身だしなみ、身支度、電話取り次ぎ、電気を消す等	8	2	4	2
基本的な生活習慣に関すること	57	30	17	10
・着替え・衣服の着脱、服たたみ	31	18	11	2
・食事をとる・仕方、箸の使い方	7	4	3	
・生活習慣、規則正しい生活	6		2	4
・トイレ	6	5	1	
・歯磨き、入浴、手洗い、ひも縛り、コップを持つ等	7	3		4
本人の態度・様子に関すること	41	10	12	19
・挨拶、返事、ことば使い	12	4	4	4
・自分のことは自分でする、進んで行う、我慢・根気強さ、最後までやり遂げる、自分で選ぶ	12	4	3	5
・自分の力で仕事ができる、働く意欲・気持ち、机に向かって集中して行う、勉強する態度	7		1	6
・音に敏感でなくなった、髪を切る、偏食がなくなった	3	1	1	1
・コミュニケーションがとれる、人前でハキハキする、名前を呼ぶと分かる	3	1	2	
・指示に従う、待つこと	2			2
・思いやりがある、自分が年長者だと自覚する	2		1	1
ことば等の学習に関すること	30	15	6	9
・ことばや文字の学習、サイン言語、お金の価値、数と計算、時計・カレンダー読み、訓練				
余暇活用に関すること	21	14	4	3
・運動・体操、散歩、スキー、手芸、刺し子、歌・音楽、手遊び、絵を描く、本読み、日記を付ける、遊び、おやつ作り、スイッチを使って遊ぶ				
社会生活に関すること	9	7	1	1
・電車・バスの乗り方、買い物				
家庭でできない経験他	7		2	5
・家庭ではできないこと、家庭・学校が一貫している、集団行動				
特にない、分からない	6	2	1	3

根気強さ、やり遂げる」がどの学部でもあげられた。とくに中高等部では、「働く意欲・気持ち」「勉強する態度」「思いやり」といった内容があげられた。作

業学習等を通じて働く意欲や態度、学習等に取り組む姿勢を重視して指導が行われていること、保護者もまた、子どものこうした面での変化を高く評価していることの表れであると分かる。

「ことば等の学習に関すること」は9.1% (30)、「余暇活用に関すること」は6.4% (21)であり、学校で行われている学習活動や余暇活動に関する回答は少なかった。ことばや数等の学習で身につけたことを、家庭生活と関連づけて生かしていくまでに到っていないことが分かる。また、学校での余暇活動の多くが同年齢の集団・グループでの活動であるため、家庭での過ごし方とは異なるためと考えられる。

全体考察

富山県内の知的障害養護学校に在学する児童生徒を対象として、家庭や地域での生活実態を明らかにする目的で「家庭・地域生活実態アンケート調査」を実施した(武蔵・高野・七澤・高畑, 2002)。今回の報告では、アンケート調査の結果から、対象となった児童生徒の家庭での位置づけ・役割を探った。武蔵・高畑・平野・安達(1996, 1997)が行った知的障害養護学校の卒業生を対象とした家庭生活の実態調査の結果と比べながら、家庭内での本人の経済的な生活の程度、家庭内での本人の位置づけ、家庭生活と学校教育との関連について考察する。

1. 家庭内での本人の経済的な生活の程度

将来の生活自立を考えたとき、お金を取り扱う経験を家庭で積むことが不可欠である。その程度を明らかにするために、おこづかいの有無・額、その使い方、金銭管理について質問した。卒業生の調査(武蔵ら, 1996, 1997)では、「0円」、無回答の方も多くあり、今回の調査でもお金についての項目の回答が少ないと予想された。本調査の結果は予想を超えて、おこづかいを得ている者、金銭の管理を本人が行っている者が少なかった。とくに小学部では、お金に関心がないため、おこづかいもなく、管理も無理という回答が目についた。今回の調査で示された結果が、卒業後にも引き続いていくことが明らかになった。

お金に関心がなく、取り扱う経験をしないことが

悪循環となっており、できないことは仕方がないという捉え方が家庭にあるようである。お金を有意義に使う習慣をつけることが、家庭生活での自立性を高め、将来の地域での働く生活の基礎となることを再確認する必要がある。その上で、具体的に段階を踏んだ支援を学校が家庭と共同して計画することが求められる。まず、褒められる・認められる経験を通じて、そのごほうびとして、お金がもらえ、それを貯める経験をする。さらに、お金を具体的な強化物、例えば、食物や飲み物、好きなおもちゃや遊びと交換する機会や場面をつくり、時間や場所を決めて続けて行う。こうした段階を踏んだ支援を行えば、お金が具体的な強化物と交換できる般性の強化刺激として機能することが理解できるであろう。こうしたお金の獲得と消費の過程を家庭で実行するための支援が大切である。

2. 家庭内での本人の位置づけ

地域での生活を考えたとき、家庭内で決まった役割を持ち、余暇時間を前向きに過ごしていくことが大切である。そこで、家庭内での本人の位置づけを明らかにするために、家族との過ごし方、一人での過ごし方、決まった役割（お手伝い）について質問した。家族や一人での過ごし方は、室内で、受け身的で目的性が低く、時間を多く消費する活動であった。卒業生の調査と同様の結果であり、学校在学時から、典型的な現代の家庭に見られる団らんの過ごし方をしていることが明らかとなった。

これまで学校教育において、遊びの指導や余暇の指導はなされてきたが、家庭で行える、家庭のニーズに結びついた指導・支援になっていたとは言い難い。家族の負担が低く、いっしょに行える活動内容、誰かがいつも付き添わなくても、一人で楽しめる活動内容を増やして広げていく指導・支援が必要である。今回の調査では、年齢段階に応じて特徴的な活動も示された。「好きな物で遊ぶ」は小学部で多く、「お手伝い」は中高等部になるにしたがい、回答が多くなった。こうした活動がどのように経過していくのか、とくにお手伝いが、学校卒業後の家族の関わりとしてどのように生かされていくか継続して検討する余地がある。

また、活動を切り換えて時間を有効に過ごす方法

を指導することも必要である。いわゆる、自己の生活行動の管理である。まず、普段の日常生活の中からチャレンジ目標を定める。そして、チャレンジ目標を実行したら、記録に残す。このとき、本人の行える記録の仕方を工夫することがポイントとなる。次いで、記録を貯めて累積する。貯まったことを分かりやすく示す工夫が大切である。さらに、こうして貯まった記録を元に、本人と保護者・家庭で互いに認め合う機会を作るのである。小学部の段階から、こうした自己管理の仕方を本人に指導して、家庭で実行していく支援が大切である。

3. 家庭生活と学校教育との関連

学校教育が家庭での生活にどのような影響を与えているかを知る目的で質問した。卒業生の調査では、回答数そのものが少なく、回答の中でも、役立ったことが「特にない」「わからない」が多数を占めたが、今回の調査では、「日常生活に関すること」等について多くの回答が寄せられた。この理由として、現在まだ学校に在学中であり、学校での指導が家庭に直接に反映されていたこと、対象者の生活は学校と家庭がほとんどを占め、それ以外の地域での生活に乏しいこと、保護者が学校教育に対して高い期待を抱いていること等が推測される。

回答の内容について見ると、「日常生活に関すること」「本人の態度・様子に関すること」等が多く、「ことば等の学習に関すること」は少なかった。これは、卒業生の調査と今回の調査の結果に共通した傾向であった。その理由としては、こうした学習の効果が家庭では捉えにくいこと、学習内容と家庭生活との関連性がはっきりとしないこと、学校の教育活動で、ことば等の学習の比重の低いこと等が推測される。

新学習指導要領では、「生きる力をはぐくむこと」を目指し、「自ら学び自ら考える力の育成」「基礎的・基本的な内容の確実な定着」を求めている。学校教育の成果を家庭がどのように受け取り、生かしていくかも考慮に入れて、今一度、教育内容の精選、家庭への支援を含めた教育方法の見直しを図ることが大切である。

以上、以前に行った知的障害養護学校卒業生を対象とした調査の結果と比べながら、家庭生活の実態

と学校教育の関連について考察した。

謝 辞

アンケート調査の実施には、富山県知的障害養護学校PTA連合会に多大な協力を得た。改めて感謝したい。

文 献

福武書店教育研究所（1994）小学生（4・5・6年）の1ヶ月のこづかいの額 モノグラフ・小学生ナウ, vol. 14, 2.

福武書店教育研究所（1995）高校生の親からもらうこづかいの額 モノグラフ・高校生, vol. 45.

武蔵博文・高畑庄蔵・平野道子・安達勇作（1996）知的障害者の地域生活援助に関する基礎研究 富山大学教育学部紀要A（文科系）第48号, 99-110.

武蔵博文・高畑庄蔵・平野道子・安達勇作（1997）知的障害者の家庭生活に関する基礎研究 富山大学教育学部紀要A（文科系）第49号, 43-50.

武蔵博文・高野喜一・七澤邦彦・高畑庄蔵（2002）知的障害養護学校に在学する児童生徒の家庭・地域での生活に関する基礎研究 富山大学教育学部紀要, 56, 99-112.

付 記

このアンケート調査の一部は、平成12年度全国国立大学附属学校園関東・北信越・東海地区PTA研修会で報告した。